

令和7年度 公立鳥取環境大学
学校推薦型選抜（I型）問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は4ページ、解答用紙は2枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。なお、解答の時、句読点、「」() も 1 字とする。

世界の食料・農業と飢餓問題

私が最初に開発途上国で仕事をしたのは 1977 年 10 月でした。24 歳の時です。青年海外協力隊の畜産（酪農）隊員として、アラブの国、シリアに派遣されました。以来、様々な国や地域で、食料・農業の分野の支援業務に関わってきました。

SDGs の目標 2 に掲げられている「飢餓をゼロに（飢餓を終わらせ、食料安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する）」という目標は、現役で仕事をしていた時も FAO（国際連合食糧農業機関）をやめた今も私のライフワークとなっています。

他方、①この課題は、現在ではさらに複雑になってきています。というのも、かつては、飢餓や栄養失調は、食料の生産や供給の不足などが主な原因で起こっていました。しかし、今は世界がグローバル化するなかで、貧困や食料価格高騰、流通、配分、自然災害や伝染病、武力紛争などが原因で飢餓や栄養失調が増えているのです。

国連の最新の報告書（SOFI2023）でも「新型コロナウイルス感染症パンデミック前の水準をはるかに上回って」いること、そのため、「この状況では SDGs の目標 2（飢餓をゼロに）の達成は難しく、達成期限の 2030 年においても 6 億人近くが慢性的な栄養不足（飢餓）に陥っているだろうと推測され」とありました。忘れてはならないのは、世界の慢性的飢餓は、90%以上、開発途上国に存在していることです。今後も人口が増え続けると予測されるアフリカでは、約 5 人に 1 人が慢性的飢餓状態にあると、この国連の報告書は警告しています。つまり、この目標 2 を達成できるかどうか、という問題どころではないのです。

また、この報告書によると、「2022 年には世界人口の 29.6%（24 億人）」、つまり約 3 人に 1 人が「中度・重度の食料不安」（国連の注釈によると、食料不安とは、十分な食料を摂取できないことで、その人の生命や生活が差し迫った危険にさらされることを言います）に瀕している状態にあり、「女性や農村部の人々に多く見られ」とあります。

また、驚くことに、新型コロナが猛威をふるっていた前年の 2021 年時点ではさらに深刻で、世界の人口の 42%に当たる 31 億人（約 2.4 人に 1 人）の人々が健康的な食事を手に入れることができていなかったこともこの報告書で明らかになりました。

事実、2019 年から 2021 年の間に、健康的な食事をするのに必要な食料の価格が世界的に 6.7% 増加しており、支出に占める食費の割合の多い低所得世帯ほど大きな影響を受けました。さらに、2022 年には 5 歳未満の子どものうち、1 億 4810 万人（22.3%）が発育阻害（年齢相応の身長まで成長しないこと）、4500 万人（6.8%）が消耗症（重度の栄養不足等によりやせ細り、病気や死のリスクがあること）、そして 3700 万人（5.6%）が体重過多と先の報告書では推定されています。このように慢性的飢餓と栄養不良の世界的な傾向が、紛争、気候変動、伝染病の蔓延^{まんえん}、経済的ショック、貧困や不平等の拡大などの相互作用によって、より深刻さを増してきています。

更に同報告書によると、問題を複雑にしているのは子どもを含めた肥満の増加です。5 歳未満の子どものうち、3700 万人が体重過多にあると推定されています。昔は、裕福な人たちに肥満が多かったのですが、近年は、貧しい人たちにその傾向が見られるようになってきました。安価な炭水化物（例えばコメや麺、パン、イモ類など）やファーストフードなどの摂取に偏った食生活

が大きな原因の一つだといわれています。(中略)

人口増加と食料の将来を考える

世界の人口は 2022 年 11 月 15 日に 80 億人に達しました。私が生まれた 1953 年の人口は 26 億人ぐらいでしたから、私が生きた 70 年ぐらいの短い間に、世界の人口は実に 3 倍以上に膨らんだことになります。

国連の予想によると世界人口は 2050 年に 97 億人になるといわれ、2060 年頃まで増加の継続が予測されています。さらに 2100 年には 110 億人に達し、その後伸びが止まり横ばい状態になるといわれています。そして、この人口増加の殆どが開発途上国で起こると予測されています。

しかもこの増加する世界の人口が必要とする食料の需要を満たすために、2050 年までに (2012 年を基準にして) 食料を約 50%増産しなければならないといわれています。

では、②どこでだれがそれに見あう食料を増産するのでしょうか? 実は、世界の農耕に適した土地は、ラテンアメリカのアマゾン流域やアフリカの一部を除いてほとんど開墾しつくされていると推測されています。そのため 2050 年までに現在の 5%ほどしか耕地の増加は見込めないとされています。

中国やベトナムでは、住宅や商工業用地の増加に押されて、農耕地はすでに減少する傾向にあります。それにもまして深刻なのが、気候変動の影響です。地球温暖化による海水位の上昇は海拔の低い地域にある肥沃な農地を水没させ、さらに水害や旱魃^{かんばつ}、台風などが農業生産へ深刻な打撃を与え、食料・農業を取り巻く将来を暗くしているのです。もし、これからさき、人類が食料の増産に失敗したらどうなるでしょう。世界のいたるところで農地や食料の奪い合いや紛争が始まるのではないのでしょうか。こうした事態を未然に防ぐために、私たちは何ができるのでしょうか。

この答えを導き出すのはそう簡単ではありません。なぜなら、人口の問題、農地の問題、地球温暖化や気候変動の影響、伝染病そして紛争や戦争の影響など、簡単には解決できない要因や不確定要素が多くあるからです。(中略)

将来への食料への展望

さきに書いたように、2050 年に 97 億人にまで急増すると想定される世界人口を養うために、世界は食料を (2012 年を基準にして) 2050 年までに約 50%増産する必要があると FAO は警鐘を鳴らしました。

そして③FAO は今後、十分な農業投資や農業インフラの整備、優秀な農業試験研究者の育成等が可能になるならば、2050 年までに 50%の食料増産を達成することは可能だろうとしています。

2050 年までに 50%の食料の増産が達成されると仮定して、そのうちの約 90%は現在使われている農地において、農作物の品種改良などによる単位面積当たりの生産性や収量の増加により達成され、5%は現在使われている農地の灌漑設備^{かんがい}の充実や農地利用の更なる効率化により、残りの 5%は新たな農地の開墾により達成されるものと予測しています。つまり、食料生産に対する試験研究や品種改良などにより、現存する農地で、単位面積当たりの食料の生産性を持続可能な方法で最大限高める、という取り組みは最も重要な課題だと言っても過言ではないでしょう。

世界が力を合わせ協力し合い、そしてそれぞれの国で、その国民一人一人がどれだけ真剣に、

人類に課せられたこの重要課題に取り組むかにかかっているといえるのです。私の個人的な見方ですが、実際に達成できるかどうかを、現時点で断言するのは難しいと思います。地球温暖化や気候変動がどこまで食料生産に影響を及ぼすかを予測するのはたいへん難しく、また地球温暖化ガスの排出量削減を世界の国々がどれだけ協力して実行するかも定かではありません。更にロシアのウクライナ侵攻のように世界を巻き込む紛争や戦争の勃発によって、食料生産に対する悪影響や、食料の供給不足が起こるリスクがあります。加えて危惧されるのは、新型コロナウイルスのような強い感染力と強力な毒性を持つ新種の伝染病が再来し、世界的に蔓延する可能性です。このように、予知できない重大な不確定要素がいくつもあるからです。こう書くと、私たちの未来は暗く思えてきてしまいます。

しかし、あまり悲観的にならないで、ポジティブに希望を持っていこうではありませんか。私は、目標に向かって力を合わせ、一步ずつ着実に努力を重ねることが重要だと思います。④将来、人口や需要の増加に見合う食料の確保が可能かどうかということではなく、MUSTなのです。可能にしなければならないのです。今、自分に出来ることから始めようではありませんか。よく考えると、いろいろとありそうです。例えば、食べ物を無駄にしないとか、食べ残しを減らすとか。忘れてはならないのは、私たちには、みんなで作成し、合意した SDGs という共通目標があることです。その目標 2 には、「飢餓を終わらせ、食料安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」ことが盛り込まれています。それぞれの国は、その国の事情に即して行動計画を作成しています。(中略)

この際、大人に任せておけばいいんだ、という考えは捨てて、そうした仕組みを利用して自分にできる行動を実践することが求められているのです。

出典：小沼廣幸著「SDGs から考える世界の食料問題」 岩波ジュニア新書
岩波書店、2024 年、pp.37-56、一部改変

問 1.

- (1) 下線部①について、この課題はどうして複雑になっているのでしょうか。100 字以上 150 字以内で説明しなさい。
- (2) 新型コロナウイルス感染症が世界の食料問題を深刻にしたことが記されていますが、2019 年から 2022 年までの状況はどのようなものだったのでしょうか。また、その要因は何であったとしていますか。200 字以上 300 字以内で具体的に書きなさい。

問 2. 下線部②にあるように、食料の 50%増産は難しいと筆者は述べています。その理由は何でしょうか。200 字以上 300 字以内で説明しなさい。

問 3.

- (1) 下線部③にあるように、食料の 50%増産を可能にするには何が必要なのでしょうか。200 字以上 300 字以内で説明しなさい。
- (2) 下線部④にあるように、食料の確保のために我々にできることは何でしょうか。150 字以上 200 字以内で、自分の考えを書きなさい。